
遠音

李孟鑑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遠音

【Nコード】

N9763L

【作者名】

李孟鑑

【あらすじ】

巖島への出陣を控えた陶の軍勢でにぎわう岩国。盲目の娘、とよは市でひとりの武者と出会う。

名も何も分からぬまま、ただその声の美しさに惹かれ、心を寄せる
とよであったが、その思いは所詮、報われるはずのないものであった。

(一)

ふとこぼれかかった葉影の冷たさに誘われて、とよは両手を頬の上に置いた。なめらかな肌は、路傍に終日座りつめた疲労に火のよう^うに熱い。火照りを冷まそうとするかの^{よう}に、とよはそのまま掌で頬をさらさらとこすった。市を忙しく行き交う足音の間を巧みに縫って、時折通りの向こうを流れる川から風が緩やかに顔に当たる。ぬるいような水の臭気と、青臭さの幾分落ち着いた草の香りが身の周りに鮮やかに立って、秋草の生い茂る川端の光景が、とよの見えぬ目にも浮かぶような心持ちがした。

永興寺の門前には月六度、三と八の日に市が立つ。今日は十三の市の日であった。日々おちこちの市を回り手づくねの饅頭を商つて、とよは暮らしを立てている。往来の端に、茶売りや古着売りといった商い人の間にまじって筵を広げ、春には例えば露、夏には例えば菰の野菜餡を詰めた菜饅頭を売るのである。この商いを、とよは同じく饅頭売りをしていた母から教わった。目の不自由な娘が一人でも生きていける^{よう}にと、母は、菜の煮方、粉のこね方から市での客寄せ、銭の勘定まで、幼いうちから手を取って根気強く、とよの体へ覚えこませた。とよもまた、母と二人で市に通った二十年近くの年月においても、そして一人きりで市に座るようになったこの一年余においても、母から教わったことを寸分も変えることなく、忠実になぞって日々を暮らして来た。そんなとよの毎日は、いきおい、判で押したような単調の繰り返しになりがちであったが、そのことをとよはどう思うわけでもない。ただぼんやりと、日々の暮らしなど変わりばえせぬ方がよいのだと思っていた。自分のように身体の不自由な者にとっては、身の周りにも、己の心にも、変化の生じぬのが幸せの証しなのだと、見えぬ目は、若い身体に似合わぬそんな老けた諦観を、いつかとよの中に植えつけていた。

秋も深まったとは言え、顔にまともに照りつける陽光は未だにじりじりと熱く、とよは額にうつすら滲んだ汗を、つまんだ袖口でおさえた。とよを一人置き捨てて、通りには人々の足音や声がひと塊の喧騒に混じり合って目の前を流れ過ぎて行く。乾いた滝川かたの渦巻くようなその漠然とした喧騒の中に、物乞いの叩く鉦かねの音や、シキミ売りの運ぶシキミの強い匂いが、ふとしたはずみにくつきりとした輪郭となって浮き上がり、水流の中に魚が唐突に水音を立てる様を思わせた。

ここ周防岩国は、少し前より大内家の筆頭家老、陶晴賢すえはるかたが先鋒を率いて陣を置いていた。隣国安芸の毛利元就との戦にあたり、攻略の足掛りとするべく、先だって毛利に奪われた海上の拠点、厳島の奪還のため、岩国にて兵の集まるのを待ち、水軍の整うのを待っているのだとは、とよも聞き知っている。兎も角も、一万とも言われる陶軍の駐留で、岩国や近在の市にはにわかな活気を見せているのだ。とよの今座っているこの市も、総大将陶晴賢が本陣を置く永興寺の近くであるせいか、人の行き来の賑わしいことはひと通りではなかった。

沸き立つ雑踏から足音が一つ、こちらへ分かれたと思うと、汗を拭うとよの前に客が立った。「饅頭を二つ呉れ」若い声に混じって草摺の擦れる音がして、客は侍と察せられた。掌に乗せて差し出すと、侍はそれをさらい、空いたとよの手を無視してわざわざ膝の上へ銭を放ってよこした。ばら銭は膝に当たって弾け、たちまちそこらじゅうに散らばった。客のこのような心無い為様しやさまは別段珍しいことではなく、とよは驚きも憤りもなかったが、ただ往来の著しい喧騒に掻き消されて、何処に銭の転がったものか音を辿れなくなっただのは困った。仕方なく、その場に四つん這うようにして筵を丹念に撫で探っていると、

「その者は目が見えぬのではないか」

急に上の方から大きな声がした。周囲の騒音を切り払って耳に真っ直ぐ飛び込んで来た声に、とよはびっくりして身を起こした。

「錢を拾って渡してやれ。町の者に無体を働いてはならぬ」

恐らくは馬上より、声は続けて言った。張り切った琵琶の糸を隆と打つかのような底力のこもった声であった。その、辺りを圧せんばかりの大音声が山嵐のように頭上に次々と落ちて来る恐ろしさ、とよは思わず筵の上に縮こまった。そうやってじっとしている、声が小さく聞こえて、今しがたの侍が戻って来た気配がした。そこらを忙しく動いていたと思うと、急に手首を掴まれ、掌に錢が押し込まれた。馬上の声はこの侍の主であったのだと、とよはようやく思いあたった。市を通り抜けるうちに饅頭屋が目にとまり、御供の家来衆に命じて求めさせたということに違いなかった。そんな想像をしているうちにも、少し離れた所で馬首をめぐらすたてがみの音がして、蹄が地を踏みしめてゆったりと歩み出した。とよはそちらへ首をねじり、武者の騎馬で歩み去って行くのを耳で送った。蹄の音は耳に明瞭に、しかしすぐに形を崩し、同時に市の喧騒が満ちる潮のようにとよの前に丈を伸ばして、馬の足音も家来衆の鎧の音もやがて皆呑んで行った。

それからさほど時を置かずに饅頭は売り切れて、とよは筵や饅頭を並べていた木箱を小櫃こひつに収めてそれを負うと、日の傾きかけた市を後に帰路についた。雑木林に囲まれて軒を集める二、三の村落を行き過ぎると、あとは広々と開けた野原がひたすらに続くばかりとなる。広野を貫く一本道をとよは熱っぽい夕日に背を押されつつ歩

いた。辺り一面に茂る茅萱のさやさやと寄せる囁きの他に聞こえるものは絶えてなく、時折、手にした盲杖が道の小石を偶然に弾く、こつんという乾いた音が響いた。とよは母に伴われての市への行き帰り、幼い頃よりほとんど毎日のようにこの道を通った。野面を一面に覆ってうねる茅萱の葉叢に、母はよく海のようにだと楽しそうに言った。とよは海を知らなかった。けれどものちに何かの折に海辺を訪れた際、漣さざなみの遙かに遠くからざわざわと寄せ来るのを聞いて、海とは確かに萱の原に似ていると思った。母はまた、道の辺の茅萱の変化を見つけては、それをもつてとよに季節の移ろいを知らせた。初夏になると「銀の穂が出た」と言っとなめらかな若穂を摘み頬をくすぐった。盛夏を迎ええると「葉叢が青うなった」と言って草いきれの立ち昇る中に立ち止まり、とよと二人草の波音を聞いた。そして冬には「萱の葉もすっかり赤うなった」と言って背丈のすっかり縮んでどこもなく鋭さも鈍った葉を手に触れさせた。それが年ごとに繰り返された。とよの暗い目は色彩というものはおよそ思い浮かべることすら出来なかった。けれど母の繰り返した口にした銀、青、赤の三つの彩りだけは、漠としながらもとある一個の印象を成して、心の底を染めた。

家に着いて夕餉の粥を煮ていると、日はじきに暮れた。手鍋の底で華やかにはぜる炎の虚を衝いて背にひたと忍び寄った冷ややかな気配に、とよは日の落ちたのを察した。ただでさえとよ一人きりの寂しい家の中が、水にくぐったように一段と静まった。手鍋を火から下ろし、冷ます間とよはつと立ち上がって切り窓の傍に立った。日が地の下に吸い込まれ闇が満ちて来るこの夕暮れのひとときが、とよには昔から怖いものであった。夜を迎えた世界は急速な沈黙に侵される。それがとよには、陽光の下で楽しくはしゃいでいた草木や生き物が、夜の気配に悉く蒼ざめ口をつぐんで、何処かへさっと逃げ散ってしまうように感じられる。あたかも、悪戯が見つかり一緒に遊んでいた者は雀の散るように駆け去って、けれどもとよのみ

が彼らの背を追えずに、静まり返った不安の中に置き残されるような心細さがあった。顎を上げてとよは切り窓から空へ顔を向けた。種々に色を変えて暮れなずんで行く夕映えや、つるりと冷たい月や痛いように瞬く星や、そんな夜の景色がもし見えたならば、これ程に寂しくはないであろうにと、天を仰ぎながら儂い願いを浮かべた。

いつしか遠くを茅萱の葉叢が鳴っていた。日の暮れると共に立った夕風が野を騒がせるのだった。しかし風向きの安排なのか、すぐ軒先のけやきの枝はそよとも揺れなかった。とよの耳は自然と、萱の原の遠音へと引きつけられた。葉音は川底の砂子のように野をさらさらと流れた。と思う時には雨足のようにこちらへ向かって滑って来た。がそれはいつもとよの元までは辿り着かなかった。皆途中で薄らいで消え、そして音の途絶えたのちには、時の止まった静寂がしんと辺りを覆った。その遠い葉音の中に、ふととよは、今日市で会った騎馬武者の声を聞いた。あれ程に恐ろしいと思ったその声であったのに、今風に紛れて不意に耳元に立ち現れた武者の声は、何故か荒々しい語調や声音の激しさや、そんな鋭さは洗われたように欠け落ちて、長く尾を引きつつ絶えていく楽音にも似た、柔らかな余韻となって心に思い起こされるばかりであった。夕風が草叢を幾度となく揺らしては過ぎ、その度とよの耳は、その向こうに一度会ったきりの人の声を聞いた。静けさが細く匂い立って、胸に迫るように思われた。

十八の市が巡って来た。とよはまた、永興寺の門前に商い人となった。通りの、のぼせたように賑わしいことは相も変わらなかった。人波は揉み合って流れるうちにしばしばおのずから形を崩し、とよの背や肩に幾遍ももたれかかつては歩む足元をよろめかせた。人混みの内に鎧やら打ち物やらの鳴る音が耳を引くことに、とよは今更のように気がついた。岩国には陶の軍勢が駐留しているのだから侍が数多いのは当然だが、とは言えこの間来た時はこれ程侍が目立っていただろうか、数日前の十三の市の様をとよが耳の中に辿っていると、隣の筵に立ち寄った男が折り良く、この二三日で兵馬の数が目立って増えたから、出陣は間近に違いないという話を商人と始めて、とよの想像をはからずも裏付けてくれた。

溢れるほどの人出のために空気は澱んでいた。行く人の声を聞くに、今日は目の裏が洗われるばかりの晴空が澄み渡っているそうなのだが、秋空のからりとした爽涼の恩恵は、地面までは降りて来ないものらしかった。立ち込める人いきれは一本の藁わらづと苞わらづとになってその中にとよを押し包むかのようなだった。いきれには干魚の磯臭いにおいが一筋、それと空風の抜けるようなしゃがれ声が一筋、混じっていた。少し離れた場所に目籠そくりようを置いているその干魚売りの老女のことは、口をきいたことはないものの、とよはよく知っていた。老女が客相手にしていた四方山話によれば、この媼おうなは若い時分に良人も子も亡くしてしまい、以来、日々市へ干魚を担って細々と暮らしている孤独な身の上であった。この齢になると、あと愉しみと言えば死ぬことばかりじゃなどと言って客と笑っているのを聞いたこともある。老女に市で出会う度、とよはいたたまれない気持ちに駆られた。それは老女の境遇に同情を寄せてのことではなく、こちらでもまた頼る者の誰ひとりとしてない我が身の、老いてのちの行く末が彷彿

佛とするためであった。毎日朝夕に一椀ずつの粥を口にできさえすればそれが満足の全てであると、そういう思いで自らを鎧って生きているとよではあったが、本当は身体の奥にいつも細波立っている心細さと寂しさが、この時ばかりは肌の上に滲み上がって来る思いがするのだった。

魚の臭いところよりになって時々聞こえてくる老女の声を頭の隅に聞きながら、去来する様々の思いを胸の内にぼんやりと追いかけていたとよの鼻先に、ふわりと風が動いた。

「饅頭を貰おう」

はっと、とよは息を吞んだ。その声は、数日前馬上から饅頭を買ってくれたあの武者の声であった。あの夜、茅萱の葉は遠くにいつまでもささめくことをやめず、とよは寝つかれぬ夜を過ごした。武者の声と草木の柔らかに騒ぐ葉音とは、とよの中で互いに腕を絡めて印象を分かち合い、耳に残る空音は、葉叢はむらの揺れる木の下陰このしたかげを歩む度ごとに、あの夜野面を渡った葉音へ、そして更に市での記憶へと長く糸を引いた。その空音の主が全く突然に目の前に現れたのだった。とよは咄嗟にひどく戸惑い、戸惑うあまり、今しがたの声もまた自分の耳だけが聞いた空音ではあるまいかと、返事も忘れて声のした方をじっと窺った。

「この間の饅頭は思いの外美味かった。また食いたいと思うて寄ってみたのだが。残っておるか」

一瞬の沈黙ののち、再び声がして、とよは我に返った。狼狽に時を止めていた心が動き出し、雑踏の喧騒や、地表にこもった熱や魚の臭いが堰を切って五感になだれ込んだ。

「——かたじけのうございます。まだ、幾つも残っておりますから……」

ようやくのことでそう答え、被せてあった菰を取り除けると、指先にひんやりした空気が触れて来た。厚く被せた菰がいきれを遮ったおかげで、饅頭の皮はまだ家を出た時の柔らかさを保っていた。

「あの、幾つ、差し上げましょう」

とよが尋ねると、

「うむ。そうだな、三つばかり貰おうか」

武者は答え、答えながら草履をにじらせて筵の前に屈み込んだ。屈んだために声は急に間近くなった。武者の声は相変わらず、琵琶の太糸を音高く打つかのような圧力を持っていたが、とよはもはやそこに恐ろしさは感じず、代わりに静やかな重みと、なめらかな柔らかさとを聞くのだった。またとよの耳は、武者の声音の中にわずかに高く掠れた音の混じっていることを見出した。咽喉を病んでいるという風ではなく、もともとそういう声であるらしかった。最初に会った時にはまるで気づくことのなかったこの発見が、何故ということもなくとよには嬉しく思われた。

箱から饅頭を取って差し出すと、武者は手を伸べ受け取った。受け取るはずみにこちらへ身を乗り出したとみえ、引き締まった汗の気配がふと迫って頬を掠めた。肌身に染み入るような薫き物の匂いが後を追った。武者は傍らへ低く声をかけた。これをと云うのが聞こえて、脇に控えていた従者の手に饅頭を預けたようだった。香気が再びふわりと動いたと思うと、膝に置いていた手に武者の手が急に触れた。肉づきの厚い大きな手がそのままとよの手を掬い上げ、

掌に銭が乗せられた。とよの手がすっぱりと収まってしまいそうに
遅^{たくま}しい手であるのに、肌は、その遅しさとおよそ似合^あわぬめら
かさであることにとよは驚いた。鋤や鍬を握らぬ人の手はこれ程に
きれいなものかと思った。

銭を渡してしまうと、武者は膝に力をこめて立ち上がった。くび
すを返した足元に向かって、とよは礼を言^いって深々と頭を下げた。
去りかけて、しかしそこでふと歩みを止め、武者はとよの方へ振り
返った。

「明日もまた参れ。買^かうてやる」

草履の土を踏む音がして、あぶみがからりと鳴った。たてがみが
揺れた。小さないななきと、それから蹄が地を蹴^きって遠ざかった。
武者の言い置いた声が、額の上に、優しく触^ふれられたような軽い痺
れとなって残っていた。声はやがて降り落ちた雨粒のように額から
滑^{すべ}ってそのまま胸の中へと吸い込まれた。掠^{さら}れ音をわずかに含んだ
声音の内に、とよは、細流の木々の下にしぶく冷たさを思った。竹
林の野分に鋭い葉を一齐にざわめかせる寂しさを思った。浦波に揉
まれる真砂の裸足の指を擦り抜けて行く静けさを思った。薫き物の
香りが、武者の去った後を夢の名残りのように長く漂^{ただよ}った。

茅萱の群れは家路を行くとよの周りに葉音を連ねて立ち騒いだ。
風は後からとよを追い越して吹き抜けた。野面はその都度葉叢^{つと}の嬌
声が満ち、野路ばかりが下草を払^はってその中に静まっていた。目の
前に細く長く伸びるその沈黙をとよは足でなぞった。歩む身体の内
には明日への約束が包まれてあった。一筋の沈黙の中を自らもまた
黙^{もく}して辿る身体とは裏腹に、心は両脇にさざめく茅萱の如くに沸き
立っていた。胸中が絞^{しぼ}るようにせり上がって、その気持ちに背後が

闇雲にせき立てられるので、時折鋭過ぎる疾風が肌身を打ちつけて吹きすさんだ時は、むしろ息が抜けて心安まる思いがした。歩む足の間を風が擦り抜けて、腿をしきりに冷たくした。つい昨日までは夜風と言えどもこんなに寒くはなかった。秋が一足深まったのをとよは知った。また季節が巡り時が移ろって行くのだと、そんなことを思い合わせた時、風が脛をひそひそと舐めて過ぎ、とよはふと足を止めて、底に雨氣をはらんだような、その怪しげな風の来た方を、眉をひそめて振り返った。

とよの心に兆した不安そのままに、夜半を過ぎたあたりから一帯は雨となった。それも雨粒のばらばらと落ちる村雨ではなく、この季節には長く引きがちの糠雨であった。明日が気がかりで、とよは寝わらに横たわったまま眠れぬため息を幾度となく洩らした。ようやくとうとうと眠りに落ちたと思うと、風が雨足をひとところに集めて頭上をさっと煽り過ぎる音に耳を覚まされ、雨の未だ止まぬことを確かめては不安をつのらせた。翌朝を迎えても雨は濡れた薄紙の纏まといつくように降り籠めて止む気配すら見えず、とよは出来るだけ早く市へ出掛けて武者を待とうという心づもりであっただけに気が気ではなかった。切り窓からおもての様子を窺っては、しきりに氣を揉んだ。何もせずにただじっと雨の音を聞いているのが耐えがたく思われて、とりあえず餡に煮る菜を洗い、粉をふるって拵しらえる準備だけは整えたものの、雨の方はあがってくれのような態度を一向に見せなかった。気まぐれに雨足が遠のくことがあっても、四半刻も経つうちにたちまち重たい雨滴がぶり返した。焦燥の中でただ時ばかりが費やされるうち、昼が近づき、午後になり、やがて暮の鐘が雨下をしめやかに伸びて来た。とよは黙って立ち上がり、炉の周りを片づけ始めた。まな板や包丁をしまい、菜はざるに乗せて土間の隅に寄せ、粉は甕に戻した。それから、すっかり片づいた炉端にまた座った。雨の音が戻って来た。雨は、ただとよの頭上のみを目がけて降り落ちるように聞こえた。蕭蕭しょうしょうと注ぐ雨音は、虚ろな静

寂を伴って、胸に染み入った。

よりにもよって今日という日に、地上に雨を恵んだ天の気まぐれが遣る瀬なかった。確かに、今日市に行けないためにとよの困ることは何もなかった。武者もまた、雨天を知り、市が立たぬことが分かったところで、昨日の約束はきれいに忘れてしまったに違いなかった。つまり約束と言ってみたとして、それはとよにとっても、武者にとってもおおよそ重みを持たない約束であったが、しかしそうであるからこそ、今日という日はあまりに得難い日であったはずだった。心の内にささやかに灯った願いの火を、何の思慮もなしに吹き消した天の無慈悲が、とよには解せなかった。しかし一方で、とよは何も望まぬべく自らに強いて生きて来た者であった。望んだり願ったりしなれば日々は無事なのだと、むしろ背伸びし腕をかかげればきつと風に吹き倒されるのだと、そう自らに言い聞かせて来たところであったから、あの武者との今ひとたびの再会を願った以上、その報いとして身を切られる悲嘆の中に落とされることになったのは、至極まっとうな因果であるようにも思われた。とよは両膝を抱くと、膝頭の間に顔をうずめ、声を殺した涙を滂沱と流した。

(三)

次の日の昼近くなってようやく、雨声は、嘆き疲れて打ちひしがれたとよの姿に満足したように東の方へと去った。もたれていた板壁に日足がさっと落ちて、湧き出るような温もりをとよの背におのずから与えた。切り窓の傍そばに張り出したけやきの枝にはたちまち小鳥が群れ、甲高いさえずりがはぜ返った。遠くには、既に葉の表から露を払って、茅萱の海原が風を騒がせていた。騒ぐ葉音は常の如くに、隠れたもう一つの音をとよの耳に伝えた。音の影は痛いばかりに鮮やかさを深め、鮮やかなあまりにまるでその人が目の前に居ないことが信じられないような心持ちに、ややもすればとよを惑わせた。とよはじつと耳を傾けている風であった。やがてふと立ち上がるとよと身を翻し、足早に土間に下りた。

それから一刻半ばかりののち、とよの姿は門前市の道端にあった。とよの前に市はこの日も賑わっていた。丸一日以上も頭上を抑えつけていた長雨の鬱屈がからりと取り払われて浮き足立っているのは、空や鳥ばかりでなく人もまた同じようであった。陽光を浴びた地面は、吸い込んだ雨水を蒸気にして盛んに立ち昇らせた。まだ水を湛えたままの窪みは、牛車の轍わだちが転がり込む度涼しい水音を散らせた。人々はむらむらと昇る蒸気を踏み乱しつつ、泡立つ波のように、渦を巻いてしぶく清流のように、活き活きと動いた。今日は本当ならば市の立つべき日ではなかったが、盛んな人通りを当て込んで多くの商人が集まり市の景色を成しているのだった。そのためであるのか、通りには振り売りの者が普段よりも目立ち、声高に客を呼んでは次々と行き過ぎる喧騒は、賑やかと言うよりむしろ華やかであった。何もかもが浮き立って動いて行く中に、ただとよだけが道の端に佇まちんで動かない。一昨日に筵を引いたちようどその辺りに、手には拵こしらえたばかりの菜饅頭を包んだ苞つつを携え、そうして蹄の歩む音が

近づく、いちいち首をねじってそちらへ面を向けた。こうやって市に出掛けて来たからと言って、とよには何のあてがあるわけではなかった。とよは武者の名を知らない。何処に陣屋を構えているかを知らない。顔は無論知らない。武者が偶然に通るかかり、そして雑踏の中にとよを見つけてくれない限り、二人がまみえることは叶わなかった。とよの願いは、そんなただ一点のか細い奇跡にすぎるより他なく、そしてまたすがってみたとして更なる悲嘆が応えるだけかもしれない。とよの心はもはや悲しみを恐れなかったけれども、それはとよの強さではなく苦しみの故であった。熱にうかされたたとえ泥水でも夢中に飲み干す熱病人のように、とよは己を焼く苦しみから逃れたいばかりに、追い立てられるまま奈落への投身を試みようとする者であった。

人の波が運ぶ熱と、地面から立ち昇る蒸気とで、とよの肌は薄く汗が覆ったが、とよは立ち尽くしたなり拭うことも忘れていた。汗はやがておのずから引いた。往来の熱気も幾分か退いたようであった。それは日暮れの近いことを示していたが、とよは、その意味を頭で考える勇氣は持たなかった。ただ心身の疲労が急に背に被さった。軽い眩暈^{めまい}を覚えたように感じて、片手を額にあてた時、すぐ目の前の地面で、のみを打ち込むような鋭い音と共に、蹄が踏んばって立ち止まった。

「そなた、この間の饅頭売りではないか」

蹄の音にはっと一陣の緊張が胸を駆け抜けたのと、声が響いたのは同時であった。

「――あ、殿様」

とよは弾かれたように顔を上げた。堅いものが込み上げて咽元を

締めつけるようで、話しづらかった。

「このような所に立って如何した。商いはもう仕舞いか」

「いいえ、私」

思わず闇雲に歩み出たために、危うく従者の者に突き当たるところであった。

「あの、一昨日殿様が、明日また来るようにと、そう、申して下さいましたが、昨日は雨で、雨が降って来れませなんだ。けれどもしかしたら今日もここを御通りになりは致しますまいかと……」

口ごもりながらのとの話は、武者の高々とした笑い声に遮られた。

「何、それでは、そなたはここに饅頭を持ってわしを待っておったのか」

「あの、左様でございます」

「そうか、それは煩わせたな。すまぬことであつた。ならばわざわざ出向いてくれた礼に、茶でも馳走しよう。わしと来よ」

思いもよらない言葉にとよは驚いた。そのような、と首を横に振ったが、武者はもう「誰か手を引いてやれ」と言い置いて馬の首をめぐらせていた。尾をひと振りして馬は歩き出した。従者の一人が近寄って、困惑するとよの腕を取った。急ぎ立てられるまま、腕を引かれて混雑した通りを馬の後を追ううち、やがて一行が足を止めたのは、構えも重々しい門の前だった。門の両脇には練り堀の長く

伸びているのが察せられた。手引きの役は、ここで、門内から出て来た、小姓と言った風情の少年に引き継がれた。今度はこの少年のなやかな手に導かれて、樹木をとりどりに茂らせた庭を抜け、敷地の一角に設けられた茶室に通された。一隅にとよを座らせると、少年は「ごゆるりと」と言ってお下がり、とよは一人残された。あまり広くない、しかし立派な雰囲気その茶室には、落ち着いた暖気が漂っていた。そしてまた、あたかも世の中と切り離されたような静けさも満ちていた。ざわめいていた木の葉がふと口をつぐんだような静けさではなく、始めから音を持たない、いわば光の静寂だった。壁を、土でしっかりと塗ってあるせいだろうかと思ったりもした。また、まるで暖かな陽光を四角く切りつめたようだと思ったりもした。明かり障子の一角が少し開けてあるのか、時折、さやさやと言う葉音と共に涼やかな風が入り込んで静けさを柔和に乱した。空気が動く、茶室のどこかに活けてあるらしい花の匂いが、鼻孔に届いた。

身を覆う温もりと静けさは快かったが、しかし一方で、とよの心中は身体と相反して先程から落ち着かなかった。一つは、通された茶室のいかにも立派で、身の置き所のないためだった。そしてもう一つは、建物や、敷地の広々とした感じ、ここへ辿り着くまでの道のりを思い返してみても、どうも自分がいるのは永興寺であるように思われるためだった。前に述べた通り、永興寺は今度の戦の本陣であり、総大将陶晴賢が陣屋としている。その本陣に下賤の女が入り込んでいては、もしや誰かに見咎められるのではあるまいかと、一人残されてとよは気が気ではなかった。おどおどして待つうちに、ようやくおもてに足音が聞こえ、武者が入って来た。汗を拭き着物を着替えていたらしく、座ったはずみに混じりけのない香の匂いが漂った。それを合図に、茶室の周りは少し騒がしくなった。若い足音が二人来て、とよと武者の前に木皿を置いて去った。若者が下がると、今度は入れ違いに僧侶が、袈裟の穏やかな衣擦れと共に入っ

て来て隅に座った。軽やかに茶を点てまず武者の方へ出し、それからとよにも出し、そして一札のち退出して行くと、ひと時の野分が収まったように、茶室にはようやく静けさが戻った。

「遠慮せずともよい」

二人きりになると、武者はそう言って気さくに茶をすすめてくれた。先程の事柄が気にかかって仕方のないとよは、素直に手を出しかねた。武者はそれをとよの目のせいと解釈した。

「茶碗の在り処は分かるか。手渡してやろう」

「あ、いいえ、大丈夫分かります。かたじけのうございます」

答えてから、とよは思い切って、ここが永興寺か尋ねてみた。尋ねてみると、果たしてとよの思った通りであった。

「何故そのようなことを訊く」

唐突な問いかけに武者は訝^{いふふ}しげな様子を見せたが、とよが、陶軍の本陣である寺に、自分のような者がいては差し障りがあるのではないかと、それを案じているのだと言うと、

「何、そのようなことか」

と言って、たちまち笑い出した。

「先程から何やら妙な顔をしておると思えば、左様なつまらぬことを気に病んでおったのか。案ずるな、そなたはわしの客人だ。誰も咎めはせぬ」

「でも、殿様は。お叱りを受けは致しませぬか」

「わしか。ははは、わしを叱る者などはおらぬ。さあ、茶と餅を用意させた。遠慮せずにゆるりと遊んで行くがよい」

武者は、どこか悪戯っぽい笑いを含んだ調子でとよを慰め、自分から茶碗を取り上げた。とよもようやく安心して、促されるままに清々しい香りを立てる茶碗に手を伸ばし、また傍らに盛られた餅菓子をつまんだ。餅は、手にひんやりと吸いつく塗りの皿にひとくちずつの大きさに可愛らしく丸められ、上にはとろりとした餡がかかっていた。添えられた塗り箸で一つ頬ばってみると、甘味は餡ばかりでなく餅にも加えられてあった。優しい甘みは舌に溶けるそばから体中に染み透るようで、そして餡には何かの花に似た、口中にいつまでも残る良い香りが移してあった。菓子と言えば柿やグミの水菓子か、茅萱ちがやの穂のような土臭いものしか周りになかったとよには、目の前の餅菓子の雅やかな味わいはただ驚くばかりだった。茅萱の穂と言うのは、茎から萌え出る前の若穂に甘い味があつて、子供らが菓子の代用に摘み取って噛むのである。また一つとよは餅をつまんで頬に入れた。飲み下すのを惜しんでゆっくりと噛みしめると、噛むほどに新たな甘やかさが口中に広がり、頬がひとりでに笑んでしまうのが少し恥ずかしかった。京の天子様が口にするのはきつとこのような菓子であろうとよは思った。または馥郁ふいくたる香りの中に、釈迦がこの世に生まれ出た時に天から降ったと伝えられる甘露というものも、とよは思い描いた。

「気に入ったか」

笑いながら武者が訊いた。とよは素直にはいと頷いた。

「まるで口の中に花が咲いたようで……。美味しゅうございます」

「そうか。そなたの拵えた饅頭も美味いぞ」

と言って再び笑った。武者の方は餅ではなく、とよの携えた饅頭を茶菓子としていた。身に薰き物すら纏まとった武者が鄙びた菜饅頭を頬ばり、貧しい身なりのとよが宝玉のような菓子をつまんでいるというのは、端から見れば滑稽な眺めに違いなかった。武者は茶碗を取り上げ茶をすすった。笑いが途切れ、束の間、茶室がしんとした。

(四)

「ところでつかぬ事を訊くが、そなた、親きようだいなぞはおらぬのか」

そのまま笑いを収めて、武者がふと思い出したように言った。

「そのように不自由な身体であるのに、いつ見てもひとりきりで商いをしておるゆえ、少々気になったのだ。この間もそうであった。ここに布陣して日の浅い頃にも、確か一度そなたを見たように思うのだが、その際もひとりであった。商いを手伝ってくれる家の者はおらぬのか」

「いいえ」

ととよは首を振って、一昨年の冬に母が病で死んで、以来ひとりで暮らしていると話した。

「父親や、良人もおらぬのか」

武者は重ねて訊いた。とよは独り身だとだけ答えた。父親については、もとよりとよは答える術を持っていなかった。恐らくはとよの生まれる前に死んだのであろう父のことを、とよはその名前すら知らないのだった。母は生きている内に何も語らなかったし、片親しかいない子供は村では珍しくもなかったために、とよもまた父のいないことを何と思うこともなく、尋ねる折はついぞなかった。ただ母の通夜に集まってくれた人々の囁き合う話から、同郷の男ではないことだけが、どこことなく察せられた。それが、とよが父という人について知っている全てだった。言葉をにこしたとよの様子に、

武者はおおよその事情は飲み込んだようで、それ以上尋ねることはせず、

「難儀であろうの、その目では」

とつぶやくように言った。いたわる言葉が嬉しく思われて、とよは「慣れました」と微笑みを浮かべて見せた。今度は武者の方が黙っていた。茶をすすり上げる音だけが聞こえ、けれども微笑んで見せた口元に、触れるような視線が静かに当たるのが分かった。

やがて武者は茶碗を床にとんと戻すと、

「そなた、村はどこだ」

と言って話題を転じた。とよが村の名を言うと、武者はああ何某の、と名主の名をひとりごち、それが起点となって、二人の間に会話がゆっくりと流れ出した。武者は村や市の様子を尋ねたり、または身の雑事や誰かから聞いたらしい寸話などを語った。とよは武者の話に短く相槌を打ったり、はい、や、いいえ、のようなごく簡単な受け答えを返した。そのように、武者ととよの会話は、特別な色や匂いのまるでない、ごく淡く浅いものであった。時々交わす言葉が淡くなり過ぎて不自然に途絶えることすらあったが、しかしそれは二人の間に気まずさとはならなかった。沈黙は沈黙ではなく、会話のごく控えめな一つの形であるかのようにだった。

茶室は静かだった。寺の前の通りにも多くの物売りが行き来し、筵を広げているはずであったが、茶室は境内の奥まった所に建っているらしく、おもての賑わしさはほとんど届いて来なかった。まれに明かり障子の開いた向こうに売り声や喚声の聞こえることもあるにはあったが、それとて茶室の静けさを乱すどころか、むしろ際立

たせる役割りしか果たし得なかった。その静かな中であって、武者の声もまた静かだった。低く抑えて語る声は、とよに琵琶音を想像させた厚く強い音は遠くに影を潜め、笛の余韻に似た丸みのある中音と、それからあの高い掠れ音のみが澄明に耳に響いた。それが、茶室の温もりと静けさと、時に微風に乗って入り込んで来る木々の穏やかなさざめきとに、美しく相和していた。雑踏の喧騒や、荒々しい雑兵どものひしめいくさ場で大音声を上げるよりも、このような優しい空気の中で心静かにものを語るのに、武者の声はむしろ合っているようだった。澄んだ細流のような、寂しい風のような、その美しい声音をこうして何に乱されることもなく心ゆくまで聞いていられることの幸せを、とよは心の内に噛みしめた。

「あの、殿様」

幾度目かに会話が長く途切れた時、とよはためらいがちに口を切った。

「明日もまた、饅頭を買っていただけますか」

これ程の短い言葉を言ううちにも頬が熱くなって、とよは顔を上げられなかった。顔を伏せたまま急いで言葉をついだ。

「殿様のお手は煩わしませぬ。お許し下さるなら、門前の御家来衆にことづて致しとうございます。召し上がって下さいませぬか」

思い切ったようなとよの言葉であったが、

「いや、それには及ばぬ」

しかし武者は手を振って遮った。

「饅頭は今日限りでよい。わしは、明日には全軍率いて出陣せねばならぬゆえな」

「明日……」

「うむ、波の按排にもよるが、ここ数日は穏やかな日が続くそうだ。十中八九、明日が出陣であろう。出陣前の陣屋の混乱は大変なものだ。そなたの折角の心遣いも無駄になってしまうことと思う。それゆえ、わざわざ来るには及ばぬ」

「……承知致しました」

とよは小さく答えた。これで、武者と自分とを繋ぐものは何もなくなるのだと思った。けれどもそれは、もとより分かつていたはずのことに違いなかった。とよはうつむいていた顔をようやく上げた。両手をつき、

「御武運をお祈り致します」

武者の方へ頭を下げた。武者は

「うむ」

と短く答えた。どことなく言葉少なげであった。それを潮にとよはいとまを告げた。武者は傍らへ立って来て、ずしりと銭の詰まった皮袋をとよの手に握らせた。とよは両手でおしただくようにして、皮袋を懷へしまった。それを待って、武者はとよの手を取った。

「門まで送って行こう」

と言った。

「そのような、勿体のうございます。私ならひとりで戻れますゆえ」
「初めて来た寺で、手引きもなしにどうやって戻るのだ」

無謀な遠慮を可笑しがりながら、武者はとよの手を取って立たせ、そのまま戸口へ導いて行った。戸を開けるとすぐに足音が馳せ寄って、武者に履きものを用意し、それからとよの足にも草鞋を履かせた。

茶室を出て庭に下りると、風が肌に触れた。風はおちこちの葉叢^{はむら}を低く騒がしながら、土と、落葉と、湿った苔と、松明の灯と、それから庭に植えられた木々の入り混じった、つんと冷たい匂いを身の周りにいちどに運んで来た。風の内に、とよは静まった肌寒さを感じた。歩み出そうとして、武者はその足をつと止めた。

「萩の花が咲いたのだな」

と、ぽつりと言った。秋日の移ろいを確かめるかのような、しみじみとした口調であった。武者の声に誘われて、とよも初めてその香りに気がついた。風がひとかたまりに運んで来た匂いの中から、萩の香りはみなもの落花のようにふと一点、甘やかに浮かび上がった。

「あ、香りが致します」

とよも言った。武者はそのまま立ち止まって、花に眺め入っている様子だった。武者の纏った薫き物の香りと、冷たい風の中に立ち

昇った花の香りとが、とよの鼻先で馨しく結び合った。清らかな萩の香りと共に、萩を見つめる武者の心持ちがこちらに移って来るような思いがした。やがて、武者は歩を進めた。風が立って萩の匂いを緩やかに砕き、背後へと運び去った。手を引かれて歩むとよの傍には、薫き物の香りだけが残った。

石だたみを踏んで武者ととよは庭を渡って行った。吹き寄せる風に、歩む周りには静かな葉音が穏やかな波のように絶えず鳴った。頭上をざわめきが驟雨しゅううのように行き過ぎて、足元に乾いた音のからからとこぼれるのは、先の枯れ縮れたもみじ葉でもあろうかと思つた。また石だたみを踏む傍らに重たい葉のしつとりと擦れ合うのは、桔梗や竜胆りんとうの可憐な草花でもあろうかと思つた。どこか離れた所で遣り水の落ちる音がかすかにした。藪の間で秋の虫が一声、凜と鳴いた。聞こえる音と言えよそればかりだった。それ程にこの永興寺の庭は静かだった。門の外に行き交うはずの俗世の雑音は今もって聞こえない。のみならず、陣屋には大勢の兵士が出入りしているであろうに、その声も、打ち物の音も、絶えたようにここには聞こえて来ない。まるで自分と、傍らの武者と、唯二人のみがこの世に取り残されたようだと、そんな思いを静寂はおのずからとよに抱かした。

辺りに満つる葉音の囁きに丸く包まれこの世から遠く隔てられているような心持ちを抱いて、とよは手を引かれつつ石だたみを歩いた。傍らを松の脂の匂いが過ぎた。一群れに植えられた竹叢たけむらの、鋭い葉の蕭然しょうぜんと鳴く音が過ぎた。足の下には短い石段が過ぎた。遣り水は近づいたり、遠ざかったりした。石段を下りる時、武者はとよを支えるように、握った手に少し力をこめた。

山門を出ると、人もまばらになった通りは虚ろに寂しかった。門柱の傍らに据えられた篝籠かがりかごの中に薪のはぜる音ばかりが鋭くこだま

した。門前には駕籠が待っていた。とよを村まで送り届けるための駕籠であった。乗るようにとよを促して、武者は握っていた手を離した。いつしか地に下りていた夕暮れの、冷ややかな孤独が掌にしんと沁みた。

「達者で」

短く、武者の声がした。とよは黙ってこうべを深く垂れた。駕籠昇^かきの者が腕を取って駕籠に乗せた。戸がぱたりと閉じ、駕籠はすぐに動き出した。その夜、茅萱の葉叢はそよとも揺れなかった。何も知らぬかのようにそびらを向け、無表情な沈黙ばかりをとよの耳に伝えた。

厳島にて陶の軍勢が敗走したとの報にとよが接したのは、それから半月近く経ったことであつた。陶軍は島の西岸に接する塔の岡に布陣し、毛利の出城である宮尾城と対峙していた。そこへ、十月一日の早朝、折りからの風雨を衝いて渡島した毛利軍に二方からの奇襲を受けたのである。苛烈と酸鼻を極めた戦いのすえ、陶軍は総勢二万のうち、四千人が命を落とした。八千と言う者もあつた。どのみち流れた血があまりに多過ぎて、正しい数は誰も知らなかった。討ち死にした者の中には総大将陶晴賢の名もあつた。晴賢は一旦は追手を振り切つて島の南端に近い大江浦まで逃れた。しかしそこに舟を見つけられず、脱出叶わぬと悟つてそのまま山中に取つて返し、自刃して果てたのだと、速耳の商人は周りに人を集め大声で語つた。その日とよは、永興寺の練り堀の傍らに長いこと佇んで動かなかつた。季節が晩秋に移ろつた通りは、人が絶えると風ばかりが残り、薄闇は骨にまで沁み入るようだった。武者の名をとよは訊かなかつた。生死を断ずる術などないはずであるのに、とよの心はしかし武者の死を疑わなかつた。のみならず、あの風に絶えて行く鐘の音の

ような、儚く美しかった声音の思い起こされる時、その人の死ぬさだめを、巡り会うそのずつと遠い昔より知っていたような、そんな思いすら身の内に迫った。

厳島にて陶晴賢を破った毛利元就はすぐさま兵を返し、周防との国境を破った。安芸と境を接する岩国は真つ先に侵攻を受け、ついこの間まで陶軍の本陣であった永興寺には、半月も経たずに毛利の紋が翻ひるがえった。戦火はやがて岩国を通り過ぎた。そして多くの血を流しつつ、周防の地を西進した。そうしてついに、国主大内義長よしながは長門長府の勝山城まで追いつめられて自刃し、周防大内家はここに滅んだととよが聞いたのは、厳島の合戦からわずかに一年半ののちであつた。大内から毛利の世に変わったとて、とよの暮らしは何が変わるでもない。毎日のように菜を煮、饅頭を蒸し、市へ通い、その繰り返しがあるだけである。自分の身边にさえ何事も起こらぬならば、それで世は安寧あんねいなのだととよは思う。

こんにちに至るまで、とよは武者の死を悲しいと思ったことはない。心がその死を悲しみ、悼むには、二人の間に結ばれた絆はあまりにも淡いものであつた。けれど、茅萱の葉叢の夜風に騒いで静まらぬ夜、柔らかく冷たい糠雨の静やかに地を覆って止まぬ夜、とよは、その名すら知らぬまま別れたあの武者——陶晴賢の声を夢の中に聞いて、そのままぼっかりと目覚めてしまうことがある。流れに漂うもみじ葉がやがては水底に沈んで朽ちるさだめであるように、心に漂う思い出も、いつかは時の底に沈んで果てるのがさだめである。日々ひとひら、またひとひらと積もる歲月の中に、彼の人の声もまたうずもれ、一筋の淡い遠音となってゆくただそれのみが、とよには寂しい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9763/>

遠音

2010年10月10日15時58分発行